

タイトル：2025年度 教育セミナー（第21回）

日時：2025年9月18日（木）～21日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「現代インドネシアのイスラームにおける穏健概念：カーディリー・ナクシュバンディー・ポンドック・プサントレン・スルヤラヤ教団を事例に」

阪口 諒祐（京都大学大学院）

今回開催された「中東☆イスラーム教育セミナー」では、黒木先生や岡本先生をはじめとする先生方による専門分野のお話や、鷲見先生をはじめとする研究者としての歩みに関するお話だけでなく、さまざまな地域やテーマに取り組む大学院生の発表を聞くことができました。

まず何より、現在進行形で研究に取り組む大学院生の方々と幅広く交流できたことが、今回のセミナーで一番の収穫だったと感じています。発表では、対象とする地域や時代、ディシプリンがまったく異なる人たちが多かったのですが、そうした違いを超えて、研究の面白さや課題の普遍性に触れられたことがとても刺激的でした。普段の発表では得られないような多様な視点からコメントや質問が寄せられたことも、非常に意義深い経験でした。

全体を通して今回のセミナーを振り返ると、異なる分野や地域を専門とする研究者の方々に、自分の研究の魅力や意義をどのように伝え、どのように議論を深めていくかという点の大切さを改めて実感しました。普段は同じ分野の中で議論することが多いからこそ、異なる立場の人に伝わるように話すことの難しさと面白さを強く感じました。限られた時間のなかで、研究の背景や専門用語をどの程度説明するか、そのバランスを取るのには本当に難しいところですが、一方でそこに発表者の力量や工夫が表れるのだと思います。聞き手を自然と引き込む発表というのは、やはり誰にでも理解できる大きな入口から始まり、少しずつ具体的で深い議論へと導いていく構成がしっかりと練られているものだと感じました。自分の発表を振り返っても、今後はそうした伝わる構成をより意識していきたいと感じる、良い機会となりました。

私自身の発表では、現代インドネシアにおける穏健イスラーム概念をテーマにお話ししました。多くの方にとってあまり馴染みのないトピックだったこともあり、資料作成にはかなり苦労しました。質疑応答では、リサーチクエストと結論の整合性、また言葉の使い方に関して十分に納得いただける回答ができなかった場面もありましたが、一方で穏健イスラームの実態や民衆の視点に関心を寄せてくださる質問も多く、今後の研究を深める上でとても参考になりました。一方で、質疑の場では、即座に答えを返せず立ち止まってしまう瞬間もあり、自分の思考の浅さや整理不足を痛感することもありました。しかし、そうした経験こそが、研究者としての成長の糧になるのだと思います。今回の発表を通して、自分の研究を改めて客観的に見つめ直し、その可能性や課題を再確認することができました。ま

だ道半ばではありますが、自分の研究テーマが持つ意味や魅力を、より多くの人に伝えられるよう、今後も丁寧に探究を深めていきたいと感じています。

今回のセミナーを通して、自分の研究の面白さを再確認できただけでなく、他分野の方々との交流が新しい発想や気づきを生む大切な機会であることを改めて実感しました。このような有意義な場を企画・運営してくださった先生方やスタッフの皆さまに、心より感謝申し上げます。